

## 気象庁の予測より早く来た“想定外の津波” 原因は「海底地すべり」か？

地震の際、予測できない場所で突然起きる「津波」。海底での地すべりが原因の津波は、過去にも起きています。能登半島地震（16時10分に発生）で発生した津波は、震源に近い珠洲（すず）市では最大4.3メートル、能登町では最大4.7メートルの津波が押し寄せ、大きな被害を及ぼしました。気象庁のまとめによると、津波の第一波の到達時間は、震源に近い石川県七尾（ななお）港で16時37分でしたが、そこよりも遠い富山市は、16時13分。地震発生のおよそ3分後でした。

これについて気象庁が報告する震源とは別に、近くに津波を起こした場所＝「波源」が存在する可能性があったと中央大学理工学部の有川太郎教授は指摘しています。するとその後の海上保安庁の調査で、富山市から4キロ沖合の富山湾の海底で長さ約500メートル、幅約50メートルにわたる地すべりの痕跡が見つかったのです。



### 海底地滑りで津波が起きる仕組み



海底地すべりによってなぜ津波が起きるのか。左の図のように海底斜面の砂がいきなり滑り落ちると、砂の動きに引っ張られるように水面がいったん下がり、その後持ち上げられる運動をくりかえします。傾斜の角度が大きな地すべりが起きると、さらに大きな水位の上下差が見られます。専門家の見方によると「南海トラフ地震が発生した際にも同じような現象が起きるかもしれない」と言われています。

募金 8 万円を北陸学院キリスト教

センター（支援窓口）へ寄付します

11 円募金予定日

4 月 11 日（木）・5 月 10 日（金）

6 月 11 日（火）・7 月 11 日（木）

11 円募金（1～3 月）に集めた合計募金額は 80,755 円でした。

さまざまな募金の受け入れ先のうち、被災地の現状レポート（Facebook ページ）や、ボランティア活動の対応を積極的に進めている「北陸学院キリスト教センター」に第 1 弾の寄付をします。11 円募金を継続して北陸の支援団体につなげます。引き続き、皆様のご協力をお願いします！

# 台湾地震～花蓮県と地震～

2024年4月3日午前7時58分（日本時間午前8時58分）、台湾の東部沖沿岸を震源としたM（マグニチュード）7.4の地震が発生し、4月10日で1週間になる。これまでに13人の犠牲が確認され、連絡が取れなくなっている6人の捜索が続く一方、被災した人たちの生活の再建が課題となっている。



台湾東部沖で発生した強い地震で、揺れに合わせて波立つプールの水など、地震発生時の様子を捉えた動画がSNSで公開された。

ゆったりとした台湾の朝の風景が一変した。建物が大きく傾き、砂ぼこりを上げて山肌が崩れるニュース映像は衝撃的だった。

この地震は台湾においてここ1999年の中部大地震以来25年振りに最大級のものであり、震度6強を観測した花蓮県（カレン県）は市街地の多数の建物の損壊被害や、トンネル付近での大規模な土砂崩れ・落石などの被害が多数報告され、落石が道路の通行を妨げるなど、救助活動にも影響が出ている。



地震で被害を受けた建物＝台湾・花蓮（2024年04月03日）1999年の中部大地震以来耐震基準が強化されてきたが、まだまだ課題が多く残された古い建築物が存在している

台湾は、ユーラシアプレートとフィリピン海プレートがぶつかる位置にあり、日本と同じくM7程度の地震がたびたび起きてきた。専門家によると、今回はフィリピン海プレートが台湾島に衝突することが原因の直下型地震の可能性があり、海岸線に沿って分布する活断層で起きたとみられる。1月の能登半島地震と似たメカニズムだろうということだ。

台湾政府は中部大地震を受けて耐震基準を強化していたが、対策が行き届いていたとは言い難い。台湾を訪れる観光客には、古い建物がひしめく街並みに驚く人が多い。都市部では屋上に階を上積む違法な増築が後を絶たないという。かねて指摘されていた耐震性の低さが被害を広げた形だ。建物が倒壊し死者が出た花蓮は人口約30万人の観光拠点でアミ族など少数民族が多い。

日本は台湾と正式な外交関係こそないが、過去の震災では助け合ってきた、良好な関係を持っている。1999年の中部大地震で日本は救助隊を派遣し、阪神大震災で役立った仮設住宅を寄贈した。2011年の東日本大震災では台湾が救助隊の派遣を即座に決め、200億円を超す義援金が届けられた。能登半島地震でも直ちに救助隊を派遣する態勢をとり、日本に友好的な支援を続けてくれていた。こうして日本と台湾は、観光や経済など幅広い分野で強い結び付きが築いてきた。台湾が必要とするならば、住民の救助や医療、地震の専門家の派遣など、できる限りの支援をしていくべきではないだろうか。